

2011年度一般入試前期A日程（1月25日実施）

# 国語問題

（1ページ～14ページ）

※2012年度入試より、一般入試前期A・B・C日程および後期日程で実施される「国語」の出題範囲は「国語総合・現代文（古文・漢文を除く）」と変更になりましたので、ご注意ください。

I 次の文章は、継母の策略から身を守るために、侍従とともに住吉に隠れ住んでいる姫と、夢のお告げで住吉にやってきた恋人の少将との再会を描いた場面である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日も暮れれば、松のもとにて、「人ならば問ふべきものを」など、うちながめて、たたずみわづらひ給ひける。さらぬだにも、旅の空は悲しきに、夕波千鳥、あはれに鳴きわたり、岸の松風、ものさびしき空にたぐひて琴の音ほのかに聞こえけり。この声、律に調べ、盤渉調に澄みわたり、これを聞き給ひけん心、いへばおろかなり。「あな、ゆゆし。人のしわざには、よも」など思ひながら、その音に誘はれて、何となく立ち寄りて聞き給へば、釣殿の西面に、若き声、一人、二人がほど、聞こえ

A けり。琴かき鳴らす人あり。

B しものを。あはれあは

「冬は、をさをさしくもはべりき。このごろは、松風、波の音もなつかしくぞ。都にては、かかる所も見

れ、心ありし人々に見せまほしきよ」と、うち語らひて、「秋の夕は常よりも、旅の空こそあはれなれ」など、をかしき声してうちながむるを、侍従に聞きなして、「あな、あさまし」と、胸うち騒ぎて、「聞きなしにや」とて聞き給へば、

(3) 尋ぬべき人もなぎさの住の江にたれ松風の絶えず吹くらん  
とうち詠むるを見れば、姫君なり。

(出典 『住吉物語』)

注1 夕波千鳥||夕方の波の上を飛ぶ千鳥

注2 たぐひて||一緒にあって

注3 律||雅楽の音階の一つ

注4 盤渉調||盤渉を主音とする雅楽の六調子の一つ

注5 をさをさしく||なじみにくく

注6 秋の夕べは常よりも、旅の空こそあはれなれ||今様

問1 空欄 A には「つ」、B には「ず」の活用形が入る。最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- A ① て ② つ ③ つる ④ つれ ⑤ てよ  
B ① ざら ② ざり ③ ず ④ ぬ ⑤ ざれ

ア

イ

問2 線(1)「あな、ゆゆし。人のしわざには、よも」の説明として、最も適当なものを、次の中から選び、番号をマークしなさい。

ウ

- ① 琴の音のすばらしさに感嘆し、人が弾いているとは思えないと思っている。  
② 姫との再会を喜び、人知を越えた出会いもあるのだなと思っている。  
③ 意外な場所で姫を見つけたことをいぶかしみ、教えてくれた人に感謝している。  
④ みすぼらしい家の様子を哀れに思い、継母の計略にいきどおりを感じている。

問3 線(2)「侍従に聞きなして」の解釈として、最も適当なものを、次の中から選び、番号をマークしなさい。

エ

- ① 侍従の名前を呼んで  
② 侍従に取り次ぎを頼んで  
③ 侍従に声の主を尋ねて  
④ 侍従ではないかと思って

問4 線(3)の和歌に用いられている掛詞の組み合わせとして、最も適当なものを、次の中から選び、番号をマークしなさい。

オ

- ① 「尋ぬ」に「鶴」、<sup>なづ</sup>「吹くらん」に「蘭」を掛ける。  
② 「尋ぬ」に「鶴」、「なぎさ」に「なぎ」を掛ける。  
③ 「松風」に「待つ」、「吹くらん」に「蘭」を掛ける。  
④ 「なぎさ」に「なぎ」、「松風」に「待つ」を掛ける。

問5 本文の内容に合うものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 侍従は旅立ちたい気持ちを今様に託して詠った。
- ② 少将は夕暮れの松の下で病に苦しんだ。
- ③ 姫君と少将は歌の贈答をして気持ちを確かめあった。
- ④ 姫君と侍従は現在の暮らしに趣を見出している。

カ

Ⅱ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人間の手だけが道具を持って使えるのだという。飯を食うのに茶碗と箸を使う。茶碗を作るのに土を選び、ろくろを用い、火を使い、上釉うわぐすりをかける。箸を作るのに刃物を使う。

**A**、そのろくろを作るには、刃物を作るには、といわば際限もない手仕事の鎖が人間誕生の太古にまで続くのである。

手はある目的のために無数の道具を作り使ってきた。手は、目的達成の効果的な技術の権化であった。今、この事新しくもない事実について少々考え直しておこうと思う。

たとえば子どもの頃、何がなんでも水鉄砲が欲しくなる時があった。一度そう思いこめば私の憧れはもはや竹の筒先をしぶき出る真白な水の一滴滴に溶けこんで真夏の青空に飛んで行くのだった。茂った八ツ手の葉や笹の葉むらに快くぬれたり、時には可愛い女の子の顔にじかに飛んでも行けるのだった。水を押し出す力強い手応え。絞り出すような筒先の破裂音が耳を打ち、叩きつける勢で遠く離れた板塀や乾いた白壁に思いよらない絵文様が描ける。

ピストルやガンの形のできあいの水鉄砲などはどこにも売ってなかった。だからこそ、親に「塩から手」と無器用をわらわれていた私には、水鉄砲で水を飛ばすという目的は、当の水鉄砲を手で作るという技術にくらべて、まさしく較べものにならぬほど価値高く、つまりひとつの理想と化していた。この際、不等記号は手段、技術より目的の方へと断然大きく開かれていたのである。私は無器用な手を必死に駆使して、竹選びから何から、額に汗どころか全身汗みずくになり、「何をこの子は暑いさなかに頑張っているの」と大人からかわれても、作業はやめず、何度も失敗して、へなへなど数十センチも飛ばないようなぶざまな代物を作ってはまたやり直した。(①)

目的の価値が、理想が、手段や技術をはるかに超えている時は、その価値高い目的に到達しようと技術の努力は真摯しんしであり緊張している。技術はおのれの未熟な限界をよく知り、

**B** 己れの限界の彼方に厳然と實在展開する大きな自然の摂理や威力を信じて、技術が技術たりえているものは実はそうした神妙な霊能が援助してくるからだ謙虚に思う。そしてもつとよい仕上げをと願う。古来手仕事の職人が、いや芸術家でさえも神心に篤実だったのはそのためである。むろん技術が目的に到達しえた時の満足、歓喜は大変なものだった。理想や目的が手段や技術をはるかに凌駕している時は、この満足や歓喜も、技術の勝利、自然や目的の征服などといったことにならず、いっそう敬虔な自然への感謝に変わった。聖徳太子や小野宮惟喬親王（よしかみ）や弘法大師が職人に祠られるのは彼らがその道の技術を授

けてくれたからではあるが、彼らを媒介者として、より深くは自然神妙の靈能をおそれ、その加護が日々の手職、手仕事のその「手」に及ぶことを祈念したものであるのはいうまでもない。(②)

手段や技術が自然に対する信仰や感謝をもっている限り、手技の進歩は遅くとも着実で、仕事に心がこもり誇りも伴う。が、やがて各領域に積み重ねられて行く目的達成の **C** な手段としての技術が、さながら人間社会の文明度を示すバロメーターとなる。技術と目的との距離はせばまり、不等記号はもはやいつも目的のみ開かれるのでなく、逆に、ある種の目的は技術にとつて問題にならぬくらいたやすく達成可能なものになって行く。理想の価値が相対的に下落する。そして、その種の逆転がどんどん増えて行く。

今日我々が、かかる手段、技術の、理想、目的に対する優位化をさして、「現代」という我々が時代の繁栄や幸福を実感し享受してきたことは、否定できないだろう。

たしかに、水鉄砲を苦心惨胆して自分の手で作って遊ぶ子どもはいなくなった。その必要がなくなった。水鉄砲で水を飛ばす面白さ(価値)は容易に **D** され、子どもは自分の手でそれを作るという努力を、親にもらった金で買うという行為に容易におきかえることができる。子どもは望みのものを簡単に手に入れられるだけ、かつての私より幸せだろう、満足だろう、が、買ってもらったその種の玩具類に対してなんと彼らはあきるのも早いことか。あれからそれへ、これへと彼らの手は作るためにでなく、使うため、持ってみるためにだけ盛んに伸びる。そしてすぐ投げ出す。竹筒や布や綿や糸と格闘してでも水鉄砲を作りたい「手」は文字どおり塩辛の中に窒息させられる。もはや彼の願望と彼の手とは無縁の訣別を告げて、技術は商人が金で親たちに売る商品として寡占されている。子どもは、ことは水鉄砲という彼本来の領分の玩具であるのに、もはや手のとどかない所へ手を使う楽しみも意向も奪い去られている。それでも子どもらは本当に幸せなのか、満足なのか。相撲の手は四十八手というが人間が生涯使う手は何千手とも数知れない中で、少なくとも確実に水鉄砲を作る手は潰えてしまうのである。それが現代の繁栄、幸福と、そう自信を持っていいきれぬだろうか。そういいきれぬなら、この際だが水鉄砲くらいといって済ますことも許せる。(③)

多くの価値が、願望が、商品になり金で買えるようになったのは、願望や価値が、あれほど憧れ望んだ目的が、効果的な技術によっていと簡単に生産という過程で形になって提供されるということである。現代の技術はほとんどの理想や願望や目的を極端ないい方をすれば無価値化することによって高度の文明を誇っているのだ。人々は夙(はや)くに、かつての謙虚さを忘れ、これを目して技術は目的を圧倒した、

技術が自然に勝利したといひ放ってきた。**E** その技術によって、人間の生活は実は危険な賭けを無反省のうちに強いられてきはしなかつたか。(④)

理想や目的が容易に手の届かぬ高みにある時、技術はあたかも無限の足もとに跪きつつ、半歩一歩ずつ近づこうとする精神的な努力そのものだったが、その努力が多く目的を比較的やすやすと手に入れるに及んで精神面は急速に鈍化し、技術のなまじうることは無限への垂直的な探究であるより、すでに獲得した能力を水平的に駆使して意匠の異なった同類をほしほしに多産するという方面に固定されてくる。目的や理想への熱い願望に催されて技術が手さぐりに前進するのではなく、つまり目的のため手段を精撰するのではなく、この技術を使えばこんな物が造れるというぐあいに、逆に手段や技術がほしほしに目的を選択して**F** に次から次へ多産するようになる。大メーカーがやたらモデルチェンジするなどその好例である。

この結果、人は物の有難味を忘れ、いつ何時でもたちどころに手に入れることの可能な常備常在の財貨であるかに錯覚する。そこまで技術が優越し、つまり物質文明は極度に爛熟し、人間は自然への信仰や感謝どころか傲慢に自然を征服したと悦んできたのである。ところが、技術断然優位の文明感覚には獅子身中の虫が養われていた。限らない技術の開発拡充の中で、本来技術の根とも分母とも原点ともいふべき人間の手の能力が加速度的に置き忘れられて行った。手が利かなくなつて行ったのである。

(出典 秦恒平『手さぐり日本―手』の思索) なお問題作成上、一部省略してある)

問1 空欄 **A**、**B**、**E** に入れるのに、最も適當なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- |          |          |        |        |         |
|----------|----------|--------|--------|---------|
| <b>A</b> | ① たとえば   | ② そして  | ③ ところが | ④ ただし   |
| <b>B</b> | ① もつとも   | ② それでは | ③ ところで | ④ だからこそ |
| <b>E</b> | ① しかしながら | ② なぜなら | ③ ちなみに | ④ したがって |

ウ	イ	ア
---	---	---

問2 空欄 C、D、F に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

C ① 相対的 ② 効果的 ③ 絶対的 ④ 画一的

D ① 対比化 ② 多元化 ③ 無力化 ④ 商品化

F ① 羅列的 ② 重層的 ③ 即効的 ④ 限定的

問3 本文中、次の一文が省略されている。(①)～(④)のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

手を遊ばせてらくをして暮すのが人間生活の最高のぜいたくであり理想だというのなら、それはそれでいい。

問4 線(1)「塩辛の中に窒息させられる」の説明として、最も適当なものを、次の中から選び、番号をマークしなさい。

① 知らないうちに物を作る楽しみに誘導されていくこと

② 同じ作業を繰り返すことしかできなくなる

③ 絶対に失敗は許されないという緊張を強いられること

④ 無器用なままで向上心や意欲をそがれてしまうこと

問5 本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。

① 今日では、目的よりも技術のほうが優位に立ち、物が容易に量産され、技術の原点ともいべき人間の手の能力が置き去りにされている。

② 豊かな社会で暮す現代の子どもは、望むものすべてを親に買ってもらい、容易に手に入れることができるので、昔の子どもよりも幸せである。

③ 生産技術が発展していなかった昔は、すべての品物が、手職人によって作られていたので、現代の品物よりも品質的に優れており、大切に使用された。

④ 人は、容易に目的に到達できる技術の獲得により、物作りにおける自然への感謝を忘れてしまった。

⑤ 昔は、子どもの玩具を商品として売っていなかったため、子どもは楽しく遊ぶことができなかった。

⑥ 手仕事の職人は、技術のレベルが低かったため、立派な物を作るには、常に神仏に祈念しなければならなかった。

工 才 力 キ      ク      ケ      コ

Ⅲ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自治体の政策や都市計画がその典型であろうが、とにかく「いいこと」だけが書かれ、配置される。それもどれかに特定・集約されるのではなく、いわば足し算で「あれもこれも」と。言ってみれば、幸福の一覧表であり、一覧図である。消費経済の社会を見てもおなじことだ。モードは、あるいは広告は、気持ちのいいこと、快いもの、きれいなもので、メニューは埋め尽くされている。(①)

幸福はその不在の中で夢想される。いいかえると、幸福は、不幸のなかでいわば影の影として思い描かれるものであるから、幸福の一覧表はじつは不幸の一覧表であるはずなのに、この一覧表からはそうした隠された影がちっとも焙り<sup>あぶ</sup>でてこない。この、倦怠感が漂うとさえいえる「だるい」幸福、「薄っぺらな」幸福とは、いったい何なのだろう。

わたしたちのイメージする世界はいつのまにこんなに平板に、のっぺらぼうになってしまったのだろうか。のっぺらぼうの世界とは、凹凸のない世界である。強度のない世界である。幸福の一覧表は実現されても、そこに生まれるのは「幸福のような」世界でしかない。嗅ぎなれた世界とおなじで、異臭もまた常態になって、その異質性を溶かされてしまう。(②)

こうした溶解をもっとも端的にしめているのが、モードの論理だ。モードは、モードへの抵抗を骨抜きにする。モードは、モードを否定するもの、つまり **A** をみずからの内に併合する。それどころかそれをこそ先端のモードとして、モードの一覧表の最高位に置く。一九六〇年代以降のファッションは、ヒッピーからパンク、ぼろルック、グランジまで、あらゆる物がモード化される社会のなかで「モードなんか知らないよ」とばかりにモードに唾を吐きかけ、それを否定するものをこそ最先端のファッションとして呑み込んできた。モードから下りるモードを、モードはみずからの駆動力としてきた。いわゆる **B** が、先端のモードとしてもはやされ、CMに流されて、やがて凡庸なイメージとして擦り減ってゆく。記号のゲームとしてのモードから下りる「無印」も、脱モードの **C** として記号のゲームに呑み込まれる。モードは「外部」を封鎖してしまうのだ。(③)

そしてそのあとに来るのは、モードの **D** である。モードは未知の「新しいもの」を決定的なものとして提示することで、ひとびとの意識を煽<sup>あお</sup>ってきたのだが、あらゆるものがモードとして消費され、それを否定するものさえモード化され、やがてモード・シーンから消されてゆくなかで、モードそのものよりもモードとしての盛衰という現象そのものがよりリアルなものとなってゆき、決定的なものは何も存在しないという感覚、つまりはモードへのアパシー(感覚麻痺)こそが世界の常態になってしまふからである。こうしてモード

そのものが消費社会の駆動力として **D** してしまふ。こうして残るのは、けだるさの瀾漫する世界である。(④)

影のない幸福の一覧表は、いま、こうしたモードが擦り切れた社会のなかに提示されている。そしてそれが描く幸福のけだるさもおそらくはそこから来る。

幸福は、その不在の意識とともに描きだされる。その不在の影が感じられなくなっているというのは、「欠乏」や「必要」がなくなっているということだろうか。ひとが生命体としてその生命を紡ぎだしてゆくものであるかぎり、そういうことはありえない。じじつ、震災のような大災害に襲われ、社会的なネットワークが遮断されたときには、そういう「人間であること」の条件はむきだしになる。さらに、限られた先進地域の外に目を向ければ、「欠乏」や「必要」にむしろいまも無媒介に晒されている。「豊かな社会」「成熟社会」という、これまで流通してきた世界イメージは、そうした、生きるうえでひとがどうしようもなく迫られているものを見えにくくしている。人間が作りだしてきたさまざまな社会システムの厚い媒介でそれが見えにくくなっているだけのことなのに。

オルテガ・イ・ガセーは、文化というものを、問題としての生への解答(レシピー)のセットとしてとらえており、この解答群がより広範なもの、緻密なものになればなるだけ、つまり文化度というものが高まれば高まるほど、生への媒介が雲のように厚くなり、文化がその対処のためにあるところの、生が内蔵する問題そのものにはや触れにくくなる、あるいはその存在が意識しにくくなると言っている。彼が歴史の危機と呼ぶのは、そうした状況のことである。

この解答というのは、別の言葉では、たとえば意味とか象徴というふうを読むことができるかもしれない。幸福というものとの関連ではとくにそうおもわれる。

わたしたちは意味にとり憑かれた存在である。生きることの意味、いわゆる生きるときのその「甲斐」というものも、そこに意味を導入することで生まれる。生きがいというものも、わたしがここで何かをしていることの意味、わたしがこの生を生きることの意味への問いに深くかわるものだ。

**E** 「豊かさ」というものも、そうした有意味なもの——「よいこと」——の集積を意味するわけであって、冒頭で言った幸福の一覧表も、その「よいこと」の一覧にはかならない。「よいこと」のその「よさ」は、富であれ、快樂であれ、福祉であれ、美であれ、名

誉であれ、ひとの生にとってなんらかの意味をもつがゆえに、その有意味性によって「よさ」とされてきたのである。この「よさ」については、古代ギリシャの哲学者アリストテレスが、『ニコマコス倫理学』という著述のなかで、もつとも基本的なことからして、つぎのような指摘をしている。

人間の行為がみな幸福をめざしている点についてはだれも異論がないであろうが、いざこの幸福が何であるかということになると意見が分れる。富だ、快樂だ、名誉ある生活だ、理性に適った生活だ、というふうには、**F**、富や快樂にしても、名誉ある生活や理性に適った生活にしても、幸福のために望ましいものであるが、逆はありえない。幸福が富や快樂、名誉や理性のために望まれることなどありえないのだ。その点で、幸福は、他のもの手段として選ばれたい自足したもの (a self-sufficient good) である。つまり幸福とは、「いかなる場合にもけっして他のもののために追求されることのないもの」「つねにそれ自身として望ましく、けっして他のものゆえに望ましくあることのないようなもの」なのだ、と。

そうすると不幸とは、生がそうした有意味性、つまりは「望ましさ」を喪失している状態だということになる。かつてD・リースマンが消費社会に向けて『何のための豊かさ』(Abundance for what?) というふうにかかげた問いも、その意味ではアリストテレスの問いの延長線上にある。豊かさがそのためにあるところのものとは何かと、リースマンは問うているのだからである。

<sup>(2)</sup> 「豊かさ」という概念は、というか幻想は、これまでこのような問いのなかにある隙間を封じるようはたらいてきた。財や快、名誉や理性と「幸福」とのあいだの段差を等号で置き換えるために導入されてきた。**G** 幸福からその影を消去してきた。幸福の影を、つ

まりは不幸を、豊かさの欠如というふうには、きわめて単純に規定するようひとびとに促してきた。不幸にはひとつのみすばらしい顔しかなかった。しかしそのことで、つまり影を欠くことで、幸福もまた、財や快、名誉や理性など、見かけは多彩であっても、とてもみすばらしい顔つきになった。そう、のっぺらぼうの。

(出典 鷺田清一『時代のきしみ へわたし』と国家のあいだ)

問1 空欄 A、B、C に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

A ① アンチモード ② ニューモード ③ ファッション ④ ポストモード

B ① トラディショナル ② グランジ ③ アヴァンギャルド ④ スタイリッシュ

C ① ポピュラリティ ② ニュートラル ③ ブランド ④ テクノロジー

問2 空欄 E、F、G に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

E ① したがって ② しかし ③ たとえば ④ あるいは

F ① のみならず ② なお ③ つまり ④ しかし

G ① そうして ② やはり ③ だが ④ むしろ

問3 本文中、次の一文が省略されている。(①)～(④)のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

そしてふたたび平らな倦怠だけが残る。

問4 空欄 D に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、番号をマークしなさい。

① 再生 ② 暴走 ③ 逸脱 ④ 自壊

問5 線(1)「生きるうえでひとびとがどうしようもなく迫られているもの」として、あてはまらないものを、次の中から一つ選び、

番号をマークしなさい。

① 生命体としてのひとに、それがなければ「欠乏」や「必要」を感じさせるもの

② 生が内蔵する問題そのもの

③ 「成熟社会」という、これまで流通してきた世界イメージ

④ 大災害に襲われた場合にむきだしになる、人間であることとの条件

ケ ク キ カ オ エ ウ イ ア

問6

線(2)の理由として、最も適当なものを、次の中から選び、番号をマークしなさい。

コ

- ① 何のために豊かさが望まれるのかという問題がかえりみられず、きわめて単純に豊かさが追求されてきたから。
- ② 幸福の影を豊かさの欠如と規定すると、つねにモードがもてはやされる社会となり、先進地域の外の困難な状況を見なくてすむから。
- ③ 財や快、名誉や理性と「幸福」との段差を等号で結ぶと、誰にとっても幸福な人生が平等に実現されるから。
- ④ 消費経済社会の幸福の一覧表は、気持ちのいいことや快いもので埋め尽くされていて、ひとびとに生きがいを与えるから。

Ⅳ 次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) 次の項目と最も関係の深い人物を、それぞれの選択肢の中から選び、番号をマークしなさい。

1 『枕草子』

- ① 清少納言
- ② 菅原孝標女
- ③ 兼好法師
- ④ 紫式部

2 『山家集』

- ① 松尾芭蕉
- ② 宗祇
- ③ 鴨長明
- ④ 西行

3 『折たく柴の記』

- ① 杉田玄白
- ② 新井白石
- ③ 本居宣長
- ④ 井原西鶴

4 『金色夜叉』

- ① 幸田露伴
- ② 尾崎紅葉
- ③ 樋口一葉
- ④ 二葉亭四迷

5 『一握の砂』

- ① 高村光太郎
- ② 中原中也
- ③ 萩原朔太郎
- ④ 石川啄木

オ

エ

ウ

イ

ア

〔2〕 次の空欄 **カ** **コ** に入れるのに最も適当な語を、それぞれの選択肢の中から選び、番号をマークしなさい。

1 うちの親父は **カ** で人の話をまったく聞こうとしない

- ① 理非曲直
- ② 温厚篤実
- ③ 戦々恐々
- ④ 頑固一徹
- ⑤ 才気煥発

2 朝起きてみたら自分が虫になっていたとは、 **キ** な話だ

- ① 奇想天外
- ② 出処進退
- ③ 無理難題
- ④ 正真正銘
- ⑤ 艱難辛苦

3 みごと隣村との綱引き大会に勝って、 **ク** と引き上げる

- ① 青息吐息
- ② 傍若無人
- ③ 臥薪嘗胆
- ④ 油断大敵
- ⑤ 意気揚々

4 この一帯は、 **ケ** なことではやはり北海道随一だろう

- ① 一衣帯水
- ② 風光明媚
- ③ 天変地異
- ④ 玉石混淆
- ⑤ 一刻千金

5 私たちの間では **コ** で通じるから言葉は必要ない

- ① 異口同音
- ② 謹厳実直
- ③ 言行一致
- ④ 以心伝心
- ⑤ 孤立無援

# 2011年度一般入試前期A日程（1月25日実施）

## 国語問題

### I. 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題は、14ページです。どのページも切り離してはいけません。試験時間中に、印刷の不鮮明や落丁・乱丁等に気づいた場合は、手を挙げて知らせてください。
3. 試験開始までに、監督者の指示にしたがって、解答用紙の所定欄にそれぞれ正しく記入し、マークしてください。
  - ①氏名欄 あなたの氏名・フリガナを記入してください。
  - ②座席番号欄 座席番号を記入し、マークしてください。座席番号の記入のないもの、またはマークのないものは0点となります。
4. 解答用紙には、HBの黒鉛筆(シャープペンシル可)を使用し、はっきりと丁寧に記入してください。ボールペン、万年筆、サインペンなどを使用してはいけません。また、答えを訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
5. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、汚すことのないように注意してください。
6. 問題用紙は、試験終了後、持ち帰ってください。

### II. マークシート方式の解答に関する注意事項

1. HBの黒鉛筆(シャープペンシル可)で、記入枠の中の○を完全に塗りつぶしてください。マークが不完全な場合、解答が正しくても正解と判断されませんので、注意してください。

<正しい例> 

ア	①	②	●	④	⑤
---	---	---	---	---	---

 ※たとえば、アと表示のある問いに対して「3」と解答したい場合は、左記のように、解答記号アの解答欄の3を完全に塗りつぶしてください。

<悪い例> 

ア	①	②	<del>③</del>	④	⑤
---	---	---	--------------	---	---

 ※左記のような記入はしないでください。

2. 解答は、すべて解答用紙の解答記号(ア～ホ)に対応した解答欄にマークしてください。
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。